

個別語彙の航跡に映る琉球諸語史の像^{ポートレイト}

ユン ヒス
尹熙洙（総合研究大学院大学 先端学術院 博士後期課程）

2026年 3月 15日・

令和7年度 第2回「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会



個別語彙の航跡に映る琉球諸語史の像

- とある語の存在が、琉球諸語史の全体像について何らかの示唆を与えたり、他の問題を解決する手がかりになる事例の詰め合わせ
- (私が知っていないだけで、既に指摘されている部分があるかもしれませんが、そういった先行研究についても皆様にご教示いただきたいです)

- ① 沖縄語「鳩」の散発的変化とアクセント、そして「鹿肉」
- ② 宮古語多良間方言の指示詞体系と宮古語の「ように」
- ③ 地名「今帰仁」と琉球諸語の動詞・形容詞活用体系について

沖縄語「鳩」の散発的变化とアクセント、そして「鹿肉」

背景：C系列2音節名詞の第1音節長母音化

- 北琉球の一部方言では、C系列2音節名詞の第1音節の母音が長くなる
- 1930年代から議論の対象となり、近年では松森(2017)によって北琉球祖語での変化であることが提案
- 具体的な年代の設定はできるだろうか？

沖縄語の「鳩」と「鹿肉」

沖縄語「鳩」

- 現代首里方言 ho:tu < *pauto
- 母音 o: を持つことは、*pato からの散発的変化_{sporadic change} で、沖縄語の共通改新とされる (ローレンス 2006)

沖縄語「鹿肉」

- 現代首里方言 ko:nuçiçi < *kau=no çiçi ‘鹿[?]=GEN 肉’
- 朝鮮資料『語音翻訳』(1501年) には「카우루시시 *kha.wu.lwu.si.si*」とあり、『混効験集』にも似た形式の「かうのあつため ko:nu'attami」が載っている
- ko: の形は、後ろに =nu がつく形式以外では確認されない

沖縄語の「鳩」と「鹿肉」における散発的な音変化

- 「鹿肉」は *ka=no ɕiɕi が期待されるが、*kau=no ɕiɕi になっている
- 「鳩」は *pato が期待されるが、*pauto になっている
- *a > *au / _o の散発的な変化が共通している
- *a: > *au / _o のほうがより限定的で、自然ではないだろうか？

沖縄語「鹿肉」

- *ka は1音節なので、既に *ka: になっていたかもしれない

沖縄語「鳩」

- *pato は2音節だが、もしC系列なら、*pa:to になっていたかもしれない

沖縄語「鳩」のアクセント

- もし「鳩」がC系列だったら、*a: > *au / _o という変化で「鳩」と「鹿肉」の両方を説明できる
- しかし、残念ながら沖縄語「鳩」はC系列対応を示さない
- 例えば『沖縄伊江島方言辞典』によると、伊江島方言は p^ho:tu¹ で B 系列対応
- Pellard (2015: 18) は、琉球祖語 *pato B を再建している

方言間借用による説明の可能性

- 首里方言は B 系列と C 系列の区別を保持していない
- もしかすると、「鳩」は本来 C 系列で、B 系列のように見えるのは、首里方言で C > B に変化した後の形式が借用されたのではないだろうか？

この仮説で想定されるシナリオ

- 琉球祖語は *pato C を持っていた
- 首里方言で *pa:to C > *pauto B に変化した形式が他の諸方言に借用された

どうやって確認する？

- 首里方言 *pauto の影響を全く受けていない方言を見ればわかるはず
- 南琉球の与那国語では、hatu C 「鳥」『どうなんむぬい辞典』

- *a: > *au / _o の散発的变化によって「鳩」と「鹿肉」の両方を説明できる
- 「鹿肉」の場合は、既に *a: > *au / _o の変化を経験した形式が『語音翻訳』（1501年）に記されている
- C系列2音節名詞の第1音節長母音化は、*a: > *au / _o と供給関係にあるので、下限 *terminus ante quem* は1500年

宮古語多良間方言の指示詞体系と宮古語の「ように」

- 多良間方言には、普通の宮古語の ku-, u-, ka- に加えて、2種類の指示詞語根 ke- と ve- (または e-) がある
- 下地 (2006: 74) は、ke- と ve- の「対応語形」(≒ 語源) を不明としている
- セリック (2021) は、ke| 「あれ」と ve| 「これ」が d < c+c 型アクセントを持つことを指摘し、複合語由来であることを提案
- セリック (2021) は更に、*ka-jare, *u-jare のような語源を提案し、*jare の部分を日本語の三重県方言に見られる指示詞の形式と比較している

ちょっとした背景の説明

- 多良間方言では、短い母音 e の分布は基本的に語末に限られており、非語末の e は e: が散発的に短母音化した結果と考えるのが妥当
- 実際に多良間方言と近い水納方言では、これらの指示詞語根の母音が長い e: になっている (セリック 2021; セリック・大浦 2022)
- 多良間方言の e: は *aja, *oja など様々な起源を持つ
- 特に、語頭の ve: は ve:ki 「金持ち」 < *ojake のように、語頭 *o から始まる祖形に由来するものが多い (一部 *ur から始まるものもある)
- したがって、ke- と ve- はそれぞれ *kaja- または *koja-、そして *oja- に遡ると考えられ、前者は意味が「あれ」であることを考えると、*kaja- が妥当
- セリック (2021) の語源説は極めて合理的

宮古語の「ように」

- 宮古語には $n^j a: \eta \sim ne: \eta \sim ni: \eta$ 「ように」という接尾辞 (?) がある
- 多良間方言では $ne: \eta$ 、伊良部方言では $ni: \eta$ 、多くの方言では $n^j a: \eta$ の形を持ち、尹 (2025a) の再建体系では宮古祖語 $*n\epsilon: ni$ に遡る
- 例えば、 $as_1 = ga \ n^j a: \eta$ 「するように」のように使われる
- 発表者が知っている限りでは、この語も語源は不明である

宮古語の再帰代名詞

- 宮古語には *na:*, *nara* などの形式を持つ再帰代名詞がある (Shimoji 2008; Pellard 2009)
- 例えば「彼は（自分の）手を洗っている」のような文で *na:=ga* 「REFL=GEN」を使うことができる (Shimoji 2008: 498)

ここで「ように」の語源説

- **nɛ:ni* < **na-ja=ni* 「そのように (lit. REFL-よう=COP.INF)」から来ているのでは？
- (cf. 現代日本語「～のその先へ」「～のその向こう」など)
- 2音節以上の語の語末 *au* は **a* として借用された (中澤ほか 2021 参照)
- 漢語「よう（様）」がついた形式については、中古日本語 *kayau*, *sayau* 参照

多良間方言の指示詞語根 ke-, ve- の語源

- ke-, ve- は、指示詞語根 *ka-, *o- に「様にして」「様の」がついた形からの逆成
- 例えば、unu < *o=no 「その」と ul < *ore 「それ」の関係から、類推的に venu < *o-ja=no 「この (< そのような)」から vel 「これ」が作られた

より広範な琉球諸語史への示唆

- 琉球全域に分布する kan(ɕi) 「このように」、ʼan(ɕi) 「そのように」などの形式も実は *ka-ja, *a-ja のように漢語「よう (様)」を含む形式の reduction の結果かもしれない
- 中古日本語 *kayau*, *sayau* に由来するのかもしれない
- 音韻対応 s :: ʃ については、尹 (2025b) 参照

地名「今帰仁」と琉球諸語の動詞・形容詞活用体系について

地名「今帰仁」の歴史

いまきじり

- 地名「今帰仁」の初出は、『海東諸国紀』（1471年）の「伊麻奇時利城」
- 濁音 $*^ndz$ を含む音節を「時」（中期朝鮮語漢字音 *si*、日本語呉音 *ʰzi*）で記していることから、日本語の漢字音による表記と思われる
- 他にも「国頭」などの地名が見られ、『海東諸国紀』の琉球地名は日琉語話者による資料をもとにしていることがわかる

地名「今帰仁」の語源について（表記「伊麻奇時利」の sanity check）

- 前部要素は「島」、後部要素は「禁じる」で、「島（＝沖縄本島）の（南北の）移動を妨げるもの」（＝本部半島）の意か？
- 首里方言 $tɕidzijuŋ$ 「（人の行動を）止める」『沖縄語辞典』← 日本語「禁じる」
- 地名における「島」の音韻対応（ $*sima \rightarrow *ima-$, $*-ma$ ）は、尹（2025b）参照

地名「今帰仁」の変化

いまきじり

- 「伊麻奇時利」はどうやって natɕidzɨŋ になったか？

(1) 「いま」 > na

- 実は規則変化（後述）

(2) 「き」 > tɕi

- 自明

(3) 「じり」 > dzɨŋ

- 不明

順行硬口蓋化と異化的非硬口蓋化

順行硬口蓋化

- 北琉球諸語における $*C > C^j / i_ \{e, a, o\}$ の変化
- 例えば、琉球祖語 $*pikari$, $*pi^n\text{dari}$ > 首里方言 $\phi it\check{c}ai$ 「光」、 $\phi id\check{z}ai$ 「左」
- ただし、沖縄語においては、 $C = *m, *r$ の場合は硬口蓋化しない
- 琉球祖語 $*sirami$, $*kimo$ > 首里方言 $\check{c}ira\check{n}$ 「虱」、 $t\check{c}imu$ 「肝」
- Serafim & Shinzato (2021: 57) は『おもろさうし』の「いみや」 < $*ima$ を例外とする

本当に $C = *m, *r$ の場合は硬口蓋化しなかったのか？

- 実は、一回硬口蓋化したのが、 $*m^j, *r^j > *m, *r / i_$ の変化によって戻された

異化的非硬口蓋化を支持する証拠 (1) *iri の場合

- 琉球祖語 *iri は、順行・逆行硬口蓋化の影響を受けない

	「鳥」	「霧」
琉球祖語	*tori	*kiri
現代首里方言	tui	tçiri

- 異化的非硬口蓋化を設定すると、わかりやすくなる

	「鳥」	「霧」	「風」
琉球祖語	*tori	*kiri	*sirami
順行・逆行硬口蓋化	*tor ^j i	*k ^j ir ^j i	*çir ^j ami
異化的非硬口蓋化 (*m ^j , *r ^j > *m, *r / i_)		*k ^j iri	*çirami
現代首里方言 (*k ^j , *r ^j > tç, j)	tui	tçiri	çiraŋ

異化的非硬口蓋化を支持する証拠 (2) 散発的 *çi 脱落語の場合

- 琉球祖語 *asita > *ʔaçitça > 首里方言 ʔatça 「明日」など、語中の *çi が散発的に脱落した語がある
- 琉球祖語 *pasira > *paçir^ja > 首里方言 ha:ja 「柱」の場合は *r でも順行硬口蓋化が生じて（その結果が残って）いる

	「鳥」	「霧」	「虱」	「柱」
琉球祖語	*tori	*kiri	*sirami	*pasira
順行・逆行硬口蓋化	*tor ^j i	*k ^j iri	*çir ^j ami	*paçir ^j a
散発的 *çi 脱落				*par ^j a
異化的非硬口蓋化 (*m ^j , *r ^j > *m, *r / i_)		*k ^j iri	*çirami	
現代首里方言 (*k ^j , *r ^j > tç, j)	tui	tçiri	çiraŋ	ha:ja

地名「今帰仁」の変化（再び）

いまきじり

- 「伊麻奇時利」はどうやって natçidziŋ になったか？

(1) 「いま」 > na

- $*?ima > *?im^ja > *?mm^ja > *?mn^ja > *n^ja > na$ は規則変化
- 3モーラ以上の名詞では、語頭の子音連結は許されず、最初の子音が脱落する
- 「いみや（今）」と「みやきせん（今帰仁）」『おもろさうし』の差

(2) 「き」 > tçi

- 自明

(3) 「じり」 > dziŋ

- 不明

それでもまだ「じり」の変化が説明できない

発想の転換（もとい「諦め」）

- 「じり」 > dzin のような変化は、一時期の沖縄語北部方言の特徴だったのかもしれない

琉球諸語の動詞・形容詞活用体系

- (いわゆる)「リ」系と「ム」系の形がある
- 「リ」系は -uri, -ui など終わる形式、「ム」系は -um, -un など終わる形式
- 「ム」系は、Chamberlain (1895: 85) 以来、「リ」系に何らかの接尾辞 *-mV がついた形とされてきた（例えば、意志・推量の *-mu; *-wori-mu は違和感あり）
- しかし、単に「り」が「ん」になる変化 *ori# > *on# > *om# の結果かもしれない

「リ」系の変種としての「ム」系

- 「ム」系の「リ」+「ム」という構造が直接的に現れる（と解釈される）のは、発表者が知る限りでは宮古語の母音語幹動詞の終止形しかない
- しかし、宮古語の活用体系は他の琉球諸語に比べるとかなり異質的なので、宮古語においては -m の部分だけが接尾辞として導入された可能性もある
- シテ中止形という類例もある（音便語幹は存在せず、*site に由来する接辞を使っている）

歴史的背景

- 「ム」系は、15～16世紀の沖縄語を記録した外国資料や『おもろさうし』などの文献には見られない
- 16世紀以降のとある時期に、急激に琉球全域に拡散したように見える

沖縄北部の方言の特徴が琉球全域に拡散するきっかけになるような背景

- 琉球王国の第二尚氏王朝（1469年～）の出自は、北部の伊是名島
- 実際にも首里方言にその言語的影響が残っている
- tciφidziŋ 「聞得大君（女性の最上位神職）」 ≠ tcik^{wi}:juŋ 「名高くなる」 < *kikoe
- 「ム」系は、かつての沖縄語北部のとある方言で生じた *wori# > *won# > *wom# のような変化の結果が、王族の言葉使いから首里方言を経て拡散しているのではないだろうか

参考文献 (1/3)

- セリック・ケナン (2021) 「南琉球宮古多良間方言は四型であって、三型ではない」 第 217 回 NINJAL サロン, 国立国語研究所 (2021年 1月 12日).
- セリック・ケナン & 大浦辰夫 (2022) 『みんなふつ語彙集』 東京: 国立国語研究所.
- 国立国語研究所 (編) (1963) 『沖縄語辞典』 東京: 大蔵省印刷局.
- ウェイン・ローレンス (2006) 「沖縄方言群の下位区分について」 『沖縄文化』 100: 101-118.
- 松森 晶子 (2017) 「北琉球におけるC系列 2音節名詞の語頭音節の長音化 —その原因について考える—」 『日本語の研究』 13(1): 1-17.
- 中澤 光平・セリック ケナン・麻生 玲子 「南琉球諸語における漢語の借用時期と音変化の相対年代」 『日本言語学会第 161 回大会 予稿集』 京都: 日本言語学会, 78-84.
- 生塩 睦子 (編) (2009) 『沖縄伊江島方言辞典』 沖縄: 伊江村教育委員会.
- 下地 賀代子 (2006) 「多良間方言の空間と時間の表現」 博士論文, 千葉大学.
- 与那国方言辞典編集委員会 (編) (2021) 『どうなんむぬい辞典 第二版』 沖縄: 与那国町役場.

参考文献 (1/3)

- Basil Hall Chamberlain (1895). *Essay in aid of a grammar and dictionary of the Luchuan language*. Yokohama: Kelly & Walsh.
- Thomas Pellard (2009). *Ōgami: Éléments de description d'un parler du Sud des Ryūkyū*. Doctoral dissertation, École des hautes études en sciences sociales (EHESS).
- Thomas Pellard (2015). “The linguistic archeology of the Ryukyu Islands”. In Patrick Heinrich, Shinsho Miyara & Michinori Shimoji (eds.) *Handbook of the Ryukyuan languages: History, structure, and use*. Berlin/Boston/Munich: De Gruyter Mouton, pp. 13–38.
- Leon A. Serafim & Rumiko Shinzato (2020). *The language of the Old-Okinawan Omoro Sōshi*. Leiden: Brill.

参考文献 (2/3)

- セリック・ケナン (2021) 「南琉球宮古多良間方言は四型であって、三型ではない」 第 217 回 NINJAL サロン, 国立国語研究所 (2021年 1月 12日).
- セリック・ケナン & 大浦辰夫 (2022) 『みんなふつ語彙集』 東京：国立国語研究所.
- 国立国語研究所 (編) (1963) 『沖縄語辞典』 東京：大蔵省印刷局.
- ウェイン・ローレンス (2006) 「沖縄方言群の下位区分について」 『沖縄文化』 100: 101-118.
- 松森 晶子 (2017) 「北琉球におけるC系列 2音節名詞の語頭音節の長音化 —その原因について考える—」 『日本語の研究』 13(1): 1-17.
- 中澤 光平・セリック ケナン・麻生 玲子 「南琉球諸語における漢語の借用時期と音変化の相対年代」 『日本言語学会第161回大会 予稿集』 京都：日本言語学会, 78-84.
- 生塩 睦子 (編) (2009) 『沖縄伊江島方言辞典』 沖縄: 伊江村教育委員会.
- 下地 賀代子 (2006) 「多良間方言の空間と時間の表現」 博士論文, 千葉大学.
- 与那国方言辞典編集委員会 (編) (2021) 『どうなんむぬい辞典 第二版』 沖縄: 与那国町役場.

- 尹 熙洙 (2025a) 「宮古語諸方言の比較による母音祖体系の再建と 15世紀沖縄語」『方言の研究』 11: 81-106.
- 尹 熙洙 (2025b) 「琉球諸語の語彙に残る強勢言語の痕跡とその示唆」『日本言語学会第171回大会 要旨集』 京都：日本言語学会, 55-56.

謝辞

本研究は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」サブプロジェクト「日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」の研究成果の一部です。また、本研究は日本学術振興会（JSPS）科研費 JP24KJ1152 の助成を受けたものです。